次の課題文を読み、設問に答えなさい。

わたしたちは「世界を知りたい」という漠然とした欲求をもって、海外へ出かけていく。実際に出かけてみればなにか「ほんとうの世界を知る」ことができるのではないかと思う。しかしわたしたちが旅行に出かける際に集める情報にしても、日常生活のなかで受け取っている世界にかんする知識にしても、あらかじめ用意されたものとして、ある意味でステレオタイプ的なものとなっている。さらに現地で実際に見聞する物事さえも、用意され、作りあげられたものとして、どこかで見たようなステレオタイプのなかにある。

このような環境は、わたしたちのまなざしといった身体感覚や、世界の受けとり方のレベルにまで影響している。たとえば人々の移動を便利にし「観光」旅行のシステムに大きく貢献したものとして、交通機関としての鉄道の発達があった。シベルブシュによれば、鉄道の発達は、旅行者と風景との関係性を変化させたという。かつての旅人――歩いて通り過ぎる旅行者は周囲の風景に包まれそれをある種相互的に感受していた。しかし鉄道の速度は、そのような旅行者と風景との関係を断ち切った。その結果、わたしたちにはなじみのある車窓の風景が現れ旅行者には「パノラマ的に世界を眺めるまなざし」が与えられたのである。

このような変化は、身体感覚的な世界感受の仕方の変容である。世界とわたしたちの感覚的な結びつきの変化は、気づかないあいだに進行していく。私たちの身の周りには、あまりにもたくさんの情報があふれ、世界の辺境についての知識やイメージ、映像や音楽、味覚までも伝えられている。またあまりにもたやすく、短時間のうちに世界の各地にまで行ってみることができる。わたしたちは、世界をくまなく一望のもとに「パノラマ的に眺める」ことはできるが、一方で、わたしたちの意識のうちでは、現実としての世界と、記号や情報としての世界が混在し、せっかく旅行へ出かけて行っても、そこで見聞きするもの、体験されるものは「現地でなければ手に入らない知識」といったリアルな感覚を失っているのである。

もういちど、日本人の海外体験の歴史を振り返ってみよう。明治以来、日本人にとって海外というのは、何か新しい知識、経験をもたらしてくれる未知の領域の象徴的なものであった。戦前の海外渡航においては、「世界へ出かけていくこと」はリアルな目的をもっていた。留学して知識をもち帰ることは、近代化へと向かう日本社会の動きに自らが参加することに役立った。出稼ぎや移民として「労働」しに行くことは、自らの生活のためである。戦前の海外渡航の経験は、渡航者自身の生の現実にとってはっきりとした意味合いをもっていた。

それに比べてみれば、戦後の一般の日本人にとって海外旅行は、出かけていくこと自体が憧れであった。その時点では「海外へ出かけていく」という行為の原動力には、いまだ知らない未知のものへの憧れ、「世界を知りたい」という意志が含まれていた。しかし、現在では海外へでかけて行くことは、なにか確実な知識や経験を持ち帰るためのものではなく、ただ「旅をした人になりたかった」というような漠然とした欲求に支えられている。たとえば、アジアの国々を放浪する若者たちは、その国の風俗や知識を貪欲に探し求めて歩くのではなく、ただその地で生活し「ごく普通のささやかに生きている人を見て」いるのであり、同じように旅をしている自分と似たような日本人の姿に目をとめているのである。

このような現象は何を示しているといえるだろう。彼ら＝わたしたちは、自分自身が生き生活している世界の空間、自身が身体をさらしている世界と彼ら＝わたしたち自身との距離を測りかねている。わたしたちにとっては、「ほんとうの世界を知る」「ほんとうの体験をする」という感覚自体がつかみにくくなっている。ここには、「観光」というシステムとそれをとりまく現代社会がわたしたちにもたらした困難がある。わたしたちが今、面しているのは、世界に関する数多くの情報に包まれながら、自分自身の世界感受のしかたさえもが信じかねるという事態なのである。

ここで、「世界を知る」ということについて、二つの水準を区別してみる。そのことによって、わたしたちの直面している困難のかたちを浮かび上がらせてみよう。一つは、客観的な水準で「世界」を知るということであり、もう一つは、主観的な水準で〈世界〉を知る、了解するということである。

客観的な水準で「世界」を知るということは、文字どおりの「世界」について何らかの知識、情報を得るということである。知識としての「世界」を理解するという水準である。世界には何カ国の国があり、ある遺跡は何千年前のものであり、またある民族の儀礼はどのようなものであり、ある文化の食事にはこれがつきものだといったようなかたちで、「世界」に関するなにがしかの知識を得る。このような知識は、「世界」についての客観的事実に属する情報である。それは、日本製の自動車がどこの国でどのくらいの値段で売られており、中国の故宮博物館はいつの時代の建造物でありというような教科書的な知識から、パリのどこかのカフェのケーキがおいしいといった情報誌的な知識や口コミで伝えられる情報まで、さまざまにありうる。どのような流通経路を通してもたらされたとしても、すでに存在しているモノやできごとを、あらかじめわたし個人に対して外側から教えてくれる情報として、それらは客観的な「世界」の側に属する。

もう一方の主観的な水準での〈世界〉の了解とは、自分が生きている周囲の〈世界〉を感じとる、了解するということだ。わたし自身の意識、思いのなかで〈世界〉はどのような意味をもって立ち現れてくるのか、を了解するという水準である。日本車の値段がいくらかという情報は、大学で国際経済を研究している人と、トヨタの下請け工場でその自動車の部品を製造する技術者とでは意味合いが異なるだろう。研究者にとっては、日本経済の先行きを表す指標にすぎないかもしれない。技術者にとっては、自分の長年培ってきた製品の技術が、世界のどこの地域で利用され、どのように生きているのかを知ることにつながっているかもしれない。〈世界〉というのは、その人がどのように見るかによって異なっている。言い換えれば、それぞれの人は、自分の生の経路にそったそれぞれの〈世界〉へのまなざしをもっている。ある情報は、その人固有の〈世界〉へのまなざしに照らされたとき、意味あるものとして了解される。つまり、「世界」に関する知識をわたしの個人的な物語として読み込み、それをさらに自分自身の〈世界〉へのまなざしと対照させ、わたし自身の周囲の〈世界〉へのまなざしを構成し直していくことが必要なのだ。

このように区分してみれば、現在のわたしたちにとっての困難が見えてくるだろう。わたしたちは、膨大な「世界」に関する客観的な知識、情報のなかで、どれほどささやかなものであってもわたし個人の〈世界〉へのまなざしを取り出しておかなければならない。なぜならそのことによって、自分自身が何かを「ほんとうに体験している」という実感が得られるからである。そしてそ

れは常に現在のものでしかなく、最終的なものではないのだ。

「観光」のシステムは、わたしたちの住む現代社会の象徴的なできごとである。戦前の日本人が、海外へ出かけていくことによってはじめて「世界」に関する知識を手にしていたのと違って、現在では多様なレベルの雑多な情報が、「世界」に関する客観的な知識としてわたしたちの身の周りに遍在している。それらはたやすく手に入れることができるが、知識を自分にとって意味あるものとして了解するためには、その知識を自分固有の〈世界〉のなかでもう一度つかみ直していくことが必要なのである。そうすることによってはじめて、「世界」が自分自身にとってリアルなものと感じられ、またそこから相対的に自分自身の在り方を知らされるような「ほんとうの経験」が可能になる。

その意味では、わたしたちにとっては、アジアを放浪する旅先でその地の普通の人々の生活にひたってみることも、パッケージツアーの遺跡の前で感動したり、必死で買い物をしたりすることも、また、自分の部屋で雑誌を読んでいるときに、なにげなく書かれた言葉がまるで身体に染みとおるように感じられることも、同じように〈世界〉を了解する、「ほんとうの体験」になりうる契機をはらんでいるといえるだろう。

（出典　坂部晶子「海外旅行」『戦後日本の大衆文化』（昭和堂、二〇〇〇年）より）

問　現代の情報化社会のなかで「ほんとうの世界を知る」ことをめぐって、あなたの考えを述べなさい。（六〇〇字以内）